

◆ 『Intelligence』購読会員の皆さまへ：ニュース・レターNo. 68（2020年1月号）◆

新年明けましておめでとうございます。2020年を迎え、皆さまのますますのご発展をお祈りいたします。

ご愛読の会員の皆さまには、ニュース・レターとともに「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【ブログ用エッセイ募集】

会員向けブログでのエッセイは、お楽しみ頂いていますでしょうか。会員向けブログでのエッセイは回を重ね、第36回号には青梅市立美術館学芸員の田島奈都子さんが「ミュシャ《ジスモンダ》考」をご寄稿下さいました。これまでも国内外の多くの方から研究上の興味深い逸話をご執筆いただいております。このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員の中から募っております。研究に関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なさりたい方は、原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しくは、事務局までご連絡下さい。

【第132研究会】（12月21日（土）午後1時30分～5時）

・酒井信（文教大学）「江藤淳と戦後日本の文芸批評」

江藤没後20年を記念して出版された『江藤淳』（河出書房新社）所収の「アメリカと対峙する文明批評の将来——江藤淳と柄谷行人の「他者」」に基づく報告を行った。1950年代60年代の文芸批評において、政治的立場を超えた理性的討議が江藤らによって行われてきたこと、現在の両極化するネット空間にはない理性的議論を今後模索すべきであることを紹介した。

・佐藤洋一（早稲田大学）「占領末期におけるオフィシャルフォト形成の一断面——極東軍司令部 Signal Section 文書から考える」

2018年9月から九ヶ月間米国で行った写真に関する調査に基づき、1951年の極東軍司令部の文書から、写真の分類、写真のフォーマット、写真に付随する資料、軍組織無いにおける写真と写真に関する資料の流れを緻密に分析し、「オフィシャル・フォト」とは何かを詳細に論じた。

・鄭成（早稲田大学）「1950年代の中国における青年知識人の「平和的」転向について」

中華人民共和国における大衆のプロパガンダの受容について、上海出身で西洋的文化に親しんだ一青年の日記を元に考察した。公刊史料に基づけば、中国共産党のプロパガンダが即人々の意識を変えたようにイメージされがちであるが、実際にはそう容易に同質化されるわけではないことが青年の事例から明らかにされた。

特別講演

・李鎮（中国映画芸術研究センター）「建国初期の中央電影局の映画政策」（中国語題名「建国初中央電影局政策」）

コメンテーター：楊遠嬰（北京電影学院）

通訳：平井新（地域・地域間研究機構）

中国映画の発祥と最初の隆盛は上海の地で展開されたが、新中国建国前後に上海映画人の多くが香港、台湾等へ移動した。上海映画人を活用しない方針のもとで、人材不足が課題となり、映画人教育に本腰を入れるようになる。建国初期の貴重な資料を紹介しつつ、検閲から教育まで総合的に中国映画界の動向を分析した興味深い講演であった。

●1月以降の20世紀メディア研究会の開催予定は、2020年1月25日(土)、3月28日(土)、4月25日(土)に予定しております。研究会でのご報告御希望の方は、20世紀メディア研究所事務所 m20th@list.waseda.jp まで、メールにてご一報下さい。

【コラム：映画と歴史史料】

アジア歴史資料センターは、海外の研究者からのアクセスも多く、もはや研究の世界では必須のツールとなった感がある。このアジ歴のニュース・レター第30号に、特別企画インタビューとして「この世界の片隅に」の監督・片淵須直氏のインタビューが掲載されている。「この世界の片隅に」といえば、2016年に公開され、戦時下に生きる一女性の心情を繊細に、また当時の日本社会や戦争の現場について非常にリアルに描いた魅力的な作品である。とりわけ映画の後半部分、幾度となく続く呉の空襲の場面は、戦争に翻弄される人々を描く重要なシーンであり、個人的にもそのリアルさに息を呑んだ覚えがある。片淵氏はインタビューの中で、「自分たちがやっていることって、歴史そのものにアクセスするのがものすごく大事だと思って思うんです。その中にいる人間を描くときに、アニメーション作りの立場からすると、歴史をきちんと見てないと描けない」と語り、アジ歴の資料を活用していたことが紹介されている。具体的にはアジ歴が所蔵する『戦時日誌』を使い空襲当日の天気を、『戦闘詳報』で当時の街の様子などを復元し作品に反映させている。その使い方もただキーワードでヒットした部分だけを拾うのではなく、前後の史料も見て全体像つかむなど非常に専門的に利用していることが分かる。小説や映画にどこまでの時代考証を求めるかは難しいところだが、たとえ映画の中で描かれない要素であろうとも、その背後で緻密な考証を経ているかどうかでストーリーのもつ説得力が変わってくるのだと思う。それを最もよく表しているのが、片淵氏の以下の言葉である。「歴史を調べれば調べるほど、その中にいる人間がその一点だけの存在ではなくなって、周りの出来事と深く関係しているわけですね。すずさんがお嫁に行った家庭は、ワシントンやロンドンの軍縮条約と直接関係しながら存在しています。海軍工廠の工員だったのを一回クビになって、また再雇用されてとか、家族の歴史と、もっと大きな歴史が直接かかわりあっていたりするんです。そういう意味で、歴史を知っていて初めて描ける個人というものがあるのだな、というふうに思っています」。本作品は昨年12月から、遊女のシーンなどをさらに掘り下げた「この世界の（さらにいくつもの）片隅に」が公開になっている。この新たな作品で、アジ歴での史料調査が実際にどのように活かされているか確認したいと思っている。 [1月23日付 文責：梅村卓]